

一人ひとりの死生観と健康自律を支える超高齢社会の創生

Creation of a Super-Aging Society that Encourages Respect for Individual Views on an End-of-Life Good and Honorable Death and Supporting Personal Autonomy in Health Care

研究代表者 佐藤眞一（人間科学研究科教授）

研究協力者

【学内】土岐博（名誉教授・理論核物理学） 山川みやえ（医学系研究科准教授） 鈴木径一郎（共創機構特任助教） 大庭輝（人間科学研究科助教）
木多道宏（工学研究科教授） 杉田美和（工学研究科特任助教） 桂結衣（文学研究科臨床哲学研究室博士後期課程） 瀬戸ひろえ（人間科学研究科博士前期課程）
【学外】勝眞久美子（なな一訪問看護ステーション管理者） 鎌田大啓（株式会社TRAPE 代表取締役社長） 庄瀬寛（特定非営利活動法人いきいきライフ協会理事長）
苗村昌世（大阪府中央図書館司書） 森賢二（社会福祉法人大阪府社会福祉事業団職員）

共同研究機関・連携機関

吹田市（福祉部・健康医療部） 豊中市（福祉部） 箕面市（健康福祉部） 一般社団法人福祉住環境アソシエーション 社会福祉法人大阪府社会福祉事業団

1. プロジェクト概要

大阪大学の文理各分野の研究者と大学院生、地域で超高齢社会の課題に取り組んでいる多様な個人や団体、さらには大阪府や近隣の自治体との協力体制のもとに、最新の科学的方法によるデータ解析と測定法やソフトの開発、地域における市民活動、および哲学的思索を融合させて政策提言を行い、超高齢社会の課題に挑みます。本プロジェクトのホームページが開設されたことにより、日々取り組んでいる課題の動きを迅速に公開できるようになりました。

2. 2020年の取り組みと成果

① シンポジウムの開催

2020年9月に「生と死と、そして命を支えるために」と題したシンポジウムを大阪大学会館およびオンライン配信のハイブリッド形式で実施しました。大阪大学会館にはプロジェクト学外協力者、共同研究機関の担当者などが出席し、オンライン配信は多くの方々にご覧いただきました。当日卓生 SSI 長の挨拶に続いて、学内研究協力者のうちの4名が各自の研究ミッションに関する話題提供を行った上で、フロア参加者を交えた総合討論を行いました。

② 人工知能（AI）を用いた個人と社会の健康自律

大阪府の国保データベース（KDB）のデータを活用したAIを作成しています。このAIは個人の健診データから数年後の病気（糖尿病、高脂血漿、高血圧症、認知症）を予測します。来年度には大阪府

のスマホソフト「アスマイル」に搭載の予定です。このソフトは、個人的に努力が可能な歩数の増加、禁煙、体重減量などの目標値をアスマイルに入力すると、その情報を加味した上でAIが病気の予測値を推定するというものです。まさしく個人が自律的に健康を維持することになるのです。個人の自律的な健康維持は、社会全体での医療費・介護費削減につながると考えています（図1参照）。

③ 哲学カフェと雑談フロア

哲学カフェの開催が困難になる中、リラックスした時間を共有する少人数の雑談フロアを箕面市にて開催しました。高齢者は戦前の出来事を語り、学生はスマホやPCの楽しみ方を教える、というような会を3回実施しました。また、10月～12月に地域自治体・NPO・社協・自治会等との連携のもと、兵庫県たつの市下沖地区の住民と「老いと期待」をテーマに3回のオンライン哲学対話セッションを実施しました。こうした実践から得た地域における哲学対話に関する論者を『シリーズ臨床哲学5巻 哲学対話と教育』（大阪大学出版会から2021年に刊行予定）に寄稿しました。



大阪大学会館でのシンポジウムの様子
会場参加者は外部研究協力者と外部機関関係者に絞ってご参加いただいた。一般の方にはYouTubeでオンライン配信をした。



データに基づく科学的方法、地域における市民活動、 哲学的思索を融合させた政策提言

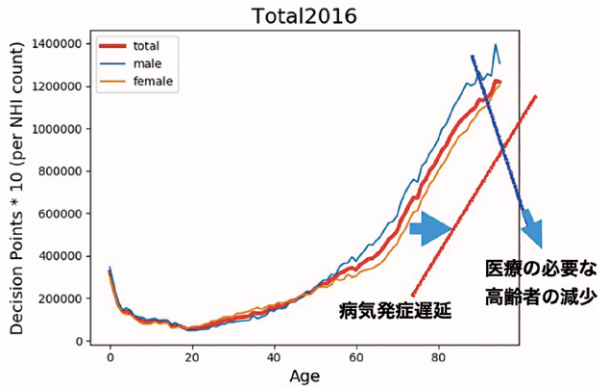


図1：一人当たりの医療費の年齢分布
病気発症を遅延させると医療費高騰の曲線が
より高齢の方にずれることで医療費が削減される。

第11回多世代・地域交流の図書館プロジェクトフォーラム

④ 図書館と認知症

本年度は、まず、オンラインで堺市西図書館でのキャプション評価を実施し、コロナ禍でも可能な空間づくりを提言しました。5月にはオンライン・フォーラムを実施し、コロナ禍であっても図書館の場で培われてきた「人肌」を介した交流を取り戻すには？というテーマで話し合いました。12月にもフォーラムを開催し、都市工学が専門のロンドン大学Nick Tyler教授や会津市でのまちづくりに取り組んでいるCode for AIZUの藤井靖史氏を迎えてデジタルテクノロジーを用いた対話、同期/非同期サービスの活用についての検討をしました。これまでの成果の一部を日本認知症ケア学会誌に掲載しました。【繁信和恵・井上典子・舟田彰・山川みやえ(2020)「地域包括ケアシステムと図書館の役割：「認知症にやさしい図書館づくり」京都市醍醐中央図書館と川崎市立宮前図書館の取り組みを中心に」『日本認知症ケア学会誌』19(2), 378-384】

⑤ 認知症の人にやさしい診断・ケア用ツール CANDY

収集した会話スクリプトをもとに、評価者間の信頼性に関する検証を進めています。また、福祉現場での活用に向けて、認知症の心理学的理解に関するeラーニング学習教材を開発し、効果検証のための調査を開始しました。

⑥ モンテッソーリケアの推進

本年度よりモンテッソーリ教育法をもとにしたケア手法の推進を目標とするミッションを開始しました。2021年1月にオーストラリアから専門コンサルタントAnne Kelly氏の参加も得て、オンラインセミナーを実施

しました。来年度には、モンテッソーリケアの実践の場として予定しているホスピスとサービス付き高齢者住宅が完成する予定です。

⑦ 地域人材の育成

哲学カフェのファシリテーターとして中堅以上に熟達していくためのフォローアップに必要な条件を探るため、調査と文献研究を行いました。並行して、哲学プラクティス連絡会第6回大会においてファシリテーターのピアレビュー会を試行して効果を検証しました。

第1回認知症ケアセミナー

3. プロジェクトの今後

2020年9月に基幹プロジェクト拡大ミーティングを開催しました。学外の研究協力者から、学内・外の研究協力者の連携を強めて、何らかのイベントができないか、との問いかけがありました。このようなイベント開催によって地域のハブとなることを目指すとともに、社会的課題の解決に向かう人材を育成することが課題と考えています。